

Title	人種の調和を求めて：グスタボ・ウルティア「ある人種の理想」に関する一考察
Sub Title	Por la armonía entre las razas : un esbozo sobre "Ideales de una raza" de Gustavo Urrutia
Author	工藤, 多香子(Kudo, Takako)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2008
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション (Language, culture and communication). No.40 (2008.) ,p.245- 265
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20081220-0245

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ハーモニー 人種の調和を求めて

——グスタボ・ウルティア「ある人種の理想」に関する一考察——

工 藤 多香子

はじめに

西半球のさまざまな地域で黒人奴隷の子孫たちが「黒人」としての自己を回復し、その権利を主張し始めていた両大戦間期、奴隷制の過去をもつキューバでもまた、一人の黒人知識人が白人中心のジャーナリズムに挑戦を試みていた¹⁾。当時の有力紙『ディアリオ・デ・ラ・マリーナ』に掲載された、黒人ジャーナリスト、グスタボ・ウルティアによる「ある人種の理想」がそれである。

「ある人種の理想」は、黒人の考えを広く国民に表明する場がないことをもどかしく思っていたウルティアの発案で、1928年4月18日に小さなコラムとして始まった。11月11日には同新聞日曜版の一ページを占める同タイトルのセクションに拡大し²⁾、その編集責任者に昇格したウルティアは、このページにほぼ毎回自身のコラム「調和」のほか、多彩な執筆者による評論や黒人作家の詩・短篇などを掲載した。「ある人種の理想」は日曜版そのものが廃止となる31年1月4日まで続いた³⁾。

以前にも、黒人の視点にたつ新聞や雑誌はすでに存在したが、その読者は黒人知識人とどまっていた。したがって、不特定多数が購読する大新聞に黒人の声を代弁するコラムが登場したことは画期的な出来事だった⁴⁾。

ウルティアの連載が始まったころのキューバでは、アフリカ的なものへの関心が欧米で高まっていたことと呼応して、アフロキューバ主義と呼ばれる芸術潮流が盛んになっていた。その担い手となったのは、ヨーロッパの文化・思想の影響を受け、前衛主義を標榜する若い芸術家だった。既成の価値観に反発し、前衛的かつ国民的な表現を求めていた彼らは、それまで「野蛮」と蔑まれてきたアフリカ的なものに新しいキューバ文化の可能

性を見出していた。やがてそれが白人文化と黒人文化とが融合した「混血のキューバ」という国民文化像の誕生を促したことを考えれば [de la Fuente 2001:183], キューバ文化史においてアフロキューバ主義が果たした役割は大きい。また、アフリカ的なものに対する文化的評価を一転させた意味でも重要な潮流だった。しかし、黒人の芸術運動であったハーレム・ルネサンスとは異なり、このアフロキューバ主義を主導したのはほとんどが白人知識人・芸術家だった。したがって、この潮流はむしろ白人エリートによる「アフリカ的なもの」礼賛であって、必ずしも黒人の声とはなっていない。

では、白人知的エリートの間でこのような人種と文化をめぐる認識の地殻変動が起きていた時代、キューバの黒人はそれをどう受け止めていたのか。そして、彼らはどのように国民文化の議論に関わっていったのだろうか。これらを考える上で、「ある人種の理想」は貴重な手がかりを与えてくれる。

本稿では、『ディアリオ・デ・ラ・マリーナ』紙に掲載されたウルティアのコラム「ある人種の理想」（以下「コラム」と略す）と、日曜版「ある人種の理想」（以下「日曜版」と略す）、とくにそこに掲載された彼のコラム「調和」を分析対象としながら、ウルティアという一人の黒人ジャーナリストがキューバ人であること、黒人であることをいかに受け止め、そしてどのような理想に向かおうとしていたのかを考察する⁵⁾。

I. 人種差別への挑戦

コラム「ある人種の理想」の掲載を始めたとき、グスタボ・ウルティア (Gustavo Eleodoro Urrutia y Quirós 1881-1958) はすでに建築家として成功していた⁶⁾。その彼が47歳でジャーナリストに転身した理由は、まず何よりも人種差別への挑戦だった⁷⁾。デパートの店員は白人ばかりで黒人女性が雇われないこと、黒人とわかったとたんに家の賃貸契約が断られることなど、ウルティアにとって人種差別は日々経験する、否定しがたい現実だった [Urrutia 280420S] [Urrutia 280425S] [Urrutia 280502S]⁸⁾。それにもかかわらず、独立後のキューバ社会では、人種の不平等や差別を公然と語ることが憚られてきた [Cook 1943:226]。

人種差別が語られない最大の理由は独立戦争に遡る。キューバの二回の独立戦争では独立軍に多数の黒人が参加していた⁹⁾。とりわけ、「青銅のタイタン」と呼ばれた混血の將軍アントニオ・マセオは第一次独立戦争で目覚ましい活躍をした英雄だった。また、第二次独立戦争の精神的指導者となったホセ・マルティは、成功のためには黒人の参加が不可欠

と考へ、独立運動への参加を呼びかけている [Martí 1963(1891):272]。キューバの独立戦争は白人と黒人の協力の下に戦われたのだ。さらにマルティは人種問題を共和国の理念と結びつけた。彼は、独立後のキューバに人種間の憎悪はなく、新しい共和国民は人種融和のもと統合されていると強調した。さらに、人種で分類することは「人類に対する罪である」として、「キューバ人とは白人以上、ムラート以上、そして黒人以上のもの」と論じたのだ [Martí 1963(1893):298-299]。彼が理想として描いたのは、人種の融合による新しい「キューバ人」の誕生へと向かうメルティング・ポットとしての共和国だった。マルティは開戦後まもなく戦死するが、彼の思想は共和国の理念として建国の道標となっていく。

第二次独立戦争は米国の介入で 1898 年に終結したが、キューバはスペインに替わり米国の統治下におかれ、独立は 1902 年によく実現した。その際、米国に内政介入の権利等を認めるプラット修正条項を憲法に追加することが条件となったとはいえ、長く独立戦争を戦ってきたキューバ人にとっては、ようやく勝ちとった念願の独立だった。そして、それはマルティの理念である人種差別のない共和国がいよいよ実現したことを意味した。否、独立とは名ばかりで米国の保護領でしかない現実から逃避するために、マルティの理想が実現したと考えたかったのかもしれない。いずれにせよ、少なからぬ建国の指導者たちが、人種平等は独立運動の時点ですでに実現しており、共和国憲法が国民の平等を保障するいま、もはや人種問題は存在しないと考えていた [de la Fuente 2001:25]。そればかりか、マルティが正しいならば、人種という概念を持ち出すこと自体が共和国を分離しかねない危険な徴候だととらえたのである¹⁰⁾。

人種を語ることそのものがきわめて困難な状況で、人種差別を論じることは簡単な作業ではない。人種差別への抗議は必然的に人種という概念を前提とする。下手をするとマルティの理想を掲げる共和国の否定とも受け取られかねない。過度に人種の違いを強調することは避けねばならなかった。その点ウルティアは慎重だった。白人と黒人の関係を、喧嘩はするが実は仲が良い兄弟にたとえながら、白人の心には「黒人の兄弟に対する愛情があるだけだ」と白人への揺るぎない信頼を示すことで、批判の矛先が白人に向かうのを巧みに回避している [Urrutia 280425S]。彼の信頼は単なる戦略ではない。互いをよく知りさえすれば「まわりに影をおとす黒雲は霧散し、真心と相互信頼の星が愛に満ちて輝く」と、ウルティアは白人の良心を信じて疑わない [Ibid.]。一見無邪気にもみえる彼の信頼の源はやはり独立戦争にある。

「[独立戦争のとき、] 黒人の英雄的行為と、一丸となって成し遂げた輝かしい業績は、

弾丸や銃剣，そして飢餓に満ちた森の中で人種偏見のあらゆる形跡を消し去り，白人は黒人を兄弟，同輩と見なしていた。」[Urrutia 280708S]

彼もまた独立戦争では人種平等が実現したと信じていた。しかも，独立後の人種差別は「ただの作り物」にすぎず，独立運動の人種関係こそが本来のキューバの姿だと確信している [Urrutia 280425S]。そして，その「本来の人種関係」が損なわれた原因としてウルティアが批判するのは，キューバの白人ではなく米国だった。戦後交流が増えたことで米国の「悪いところまで何でも真似よう」とする傾向が，キューバの「本来の人種関係」を失う原因となったと彼は考える [Ibid.]。終戦後，キューバを統治した米国人は，彼らが利用する施設に人種分離制度を導入した。それ以来，米国流の人種分離の発想がキューバの人種関係に影響していると考えたのは，当時ウルティアだけではなかった¹¹⁾。キューバの人種問題の責任を米国という外部に押し付けることは，マルティの理想を裏切ることなく人種差別を問題化するには好都合だった。かくしてウルティアは，人種差別を白人と黒人の対立としてとらえるのではなく，白人と黒人が一体となって取り組むべき国民的課題として提起する。

「われわれの土地に暮らす二つの人種間の調和を完成させようとする行動は，すべて国民的な行動である。」[Urrutia 280729S]

「各人種が別々に富を蓄えるのではなく，共和国の二大人種が調和的關係の中で生きることが，祖国の幸福には重要なのだ。」[Urrutia 281111]

人種の調和的關係——それは独立戦争時に実現していたはずの人種関係であり，マルティが共和国に託した希望である。そして，それはまた，政治・経済的には米国に支配されても，キューバらしくあり続けたいと願う多くのキューバ人の愛国心にも訴えるメッセージだった。

「キューバの黒人も白人も二大勢力が共存することを望まない。米国のような二つの文明，二大経済構造，二大対抗勢力をもつことを望まない。われわれが望んでいるのは，一つの体にただ一つの魂，キューバの魂をもつことだ。」[Urrutia 290106]

では，人種の調和的關係を回復し，一つの魂となるためには何をしなくてはならないの

か。ウルティアの答えは明快である。黒人の「文化的進歩」を示すことが必要だった。白人は「一部の人々の目立つ行動、それももっとも眉をひそめなくなる行動ばかりを見て、黒人は劣っているとみなす偏見」を抱いていると指摘する [Urrutia 280708S]。彼が批判するのは、黒人は白人よりも劣っているので文化的に進歩できないという人種主義だ。この人種主義を乗り越えるために彼が選ぶ手段は、白人文化への同化である。黒人も努力すれば進歩するのであり、白人と協力して市民生活を営めるまでに成長した黒人がすでに多くいることを広く知ってもらえば、白人の理解と協力はかならず得られると彼は確信する [Urrutia 280419S] [Urrutia 280515S]。

開始からわずか7ヶ月で「ある人種の理想」が一コラムから日曜版のセクションに拡大したことは、ウルティアの人種差別への取り組みが白人読者からも共感を得た証だった¹²⁾。日曜版となって再出発した最初の「ある人種の理想」で、ウルティアは「現在の黒人の知性」と「文化的素質と精神的洗練度」を宣伝する場が得られた喜びを素直に表現した [Urrutia 281111]。そして、彼は次のように呼びかける。

「このページは、われわれ黒人について、あるいは黒人に関することからについて意見を述べたいと思う人々——白人であれ、だれであれ——が自由に使えるページだ。それだけではない。われわれの活動に冷静で建設的な批判となるような協力を求めている。」 [Urrutia 281111]

ウルティアは「日曜版」が白人と黒人の「合作」となることを、調和的關係が実現する場となることを望んでいたのだ [Urrutia 281125]。

Ⅱ. 黒人であるよりもキューバ人として

独立後もキューバ経済は糖業に依存したままだった。1920年の砂糖価格の暴落で第一次大戦中の浮かれた砂糖景気が一気に冷え込むと景気は低迷を続け、大恐慌前夜にはすでに深刻な不況に陥っていた。失業と貧困に苦しむキューバ人は多かったが、とりわけ黒人は強烈な逆風に苦しんでいた。またこの時期、より良い職を求めて多くの黒人が都市に移住したが、そこでの黒人の住環境や衛生状態の劣悪さはしばしば深刻な社会問題として指摘された¹³⁾。

「日曜版」でもウルティアは黒人の経済問題を頻繁にとりあげ、具体的な生活改善策を

指南することもたびたびあった [Urrutia 290922]。大恐慌直後には、人種間の信頼の確立を優先してきたそれまでの「日曜版」の方針を転換し、黒人の生活改善や社会的教育に力を注ぐと宣言している [Urrutia 291110]。それほど黒人の経済状況は深刻だった。しかし、ウルティアの懸念はそれだけではない。一向に生活が改善しない黒人が自分たちの困窮を人種偏見のせいにして白人を批難することに、彼は危機感を募らせていた [Urrutia 290929]。

1929年9月15日付「日曜版」のコラム「調和」も、「どうしたら黒人は自らのおかれた状況を改善できるか」が主題となっている。それは「マーカス・ガーヴィー流に黒人の人種的連帯を説くならば、簡単にいくらかでも儲かるだろうに！」という一文ではじまる。もちろんウルティアがここで強調するのは人種的連帯ではない。

周知のとおり、マーカス・ガーヴィーはアフリカ帰還運動の提唱者である。ジャマイカ出身の彼は、1914年に万国黒人改善協会（UNIA）を設立したのち米国にわたり、ハーレムを拠点に活動して、米国やカリブ海地域の黒人から広い支持を集めた。キューバにも26年には52のUNIA支部が存在した。21年にはガーヴィー本人がキューバを訪問している¹⁴⁾。彼の運動はキューバのさとうきび農園で働くジャマイカ移民からは歓迎されたものの、キューバ黒人、とりわけ知識人をひきつけることはまれだった [Fernández Robaina 1998:121]¹⁵⁾。またガーヴィーの活動自体も24年にアフリカ帰還運動が失敗して以降は衰退の一途をたどり、キューバ政府は28年にUNIA機関誌の国内での発行を禁止、翌29年にはキューバのUNIA支部を閉鎖した [Lewis 1988:112]¹⁶⁾。したがって、ウルティアが29年9月のコラムでガーヴィーに言及するのは、すでに勢いを失った彼の運動自体を批判するためではなく、当時のキューバ社会に漂い始めていた黒人の人種意識への警戒からだ。彼は、ガーヴィーに倣って人種意識という荒々しい刺激で諸問題を解決するのではなく、より繊細で洗練された「普遍的な同胞愛、知性、そしてすべての白人と黒人に奉仕する意志」をもって取り組もうと呼びかけるのだった [Urrutia 290915]。

新大陸における人種差別という抜き差しならない現実を前に、ガーヴィーは白人社会から分離し、アフリカと再接続することで黒人種の誇りを回復しようとした。ウルティアはガーヴィーの思想が正義と尊重を求める黒人たちを引きつけるに十分魅力的であることを認めていただけに [Urrutia 290414]、経済不況の中で台頭してきた黒人の人種意識が先鋭化し、白人からの分離へと向かうことを恐れたのだ。黒人が黒人として生きるための自信と誇りを得ることは、差別に対抗する有効な手段とはなっても、人種の融合を追求するキューバの理念にはふさわしくなかった。

翌週9月22日のコラムでもウルティアは、「人種という概念はキューバ国民の生活に重要ではない」と繰り返し [Urrutia 290922]、さらに翌年10月12日の「調和」では「キューバ黒人は黒人である以前にキューバ人」であり、人種意識を持たないことは「偉大な美德、優越性と才能の証しである」とまで言っている [Urrutia 301012]。ウルティアはマルティの思想を呼び起こすことで人種意識よりも国民意識を優先すべきだと訴えたのだ。しかし、人種意識に異を唱えるとき、ウルティアはただマルティに忠実であろうとしただけではない。同一性という視点から考えたとき、ウルティアという一人の人間にとってアフリカ人と同じ「黒人」であることは、キューバ人であることよりもはるかに不確かなものだった。

「奴隷制、文化、そして黒人」という副題がついた1930年2月9日の「調和」で、ウルティアは次のように論じる。

「アメリカ大陸の黒人は本当に大文字の黒人だろうか。私にとって大文字の黒人はアフリカ大陸のアフリカ人、またはアフリカに帰ることのできるアフリカ人のことだ。このアフリカ人こそが黒人種の完璧な代表なのだ。[中略] アメリカ大陸の黒人はそうではない。なぜなら、アメリカの大地に足を踏み入れたときから、アフリカに帰ることはかなわず、スペイン人、イギリス人、フランス人などになるために、アフリカ人であることをやめたのだから。そして混血の結果、一、二世紀のうちに消滅することを運命付けられているのだから。奴隷制によって郷土と切り離され、アフリカ人とは何の共通点もない。肌の色も、性格も、言葉も、そして考え方までも。アフリカ大陸を愛していないし、アフリカ人からも愛されていない。アメリカ大陸の黒人の文明にアフリカの匂いはしない。」 [Urrutia 300209]

さらに、同じコラムの別のところでは、支配層の人種である白人との混血の結果、アメリカ大陸の黒人は彼らに「吸収され」、「白人の中に消散する」運命にあると論じ、「人種としての理想を維持することができないので、黒人であるよりもまず愛国者であると感じている」とも言っている [Ibid.]¹⁷⁾。

アフリカ大陸内外の黒人を同一の地平でとらえようとしたガーヴィーとは対照的に、ウルティアはアフリカ大陸の黒人とアメリカ大陸の黒人とを同一性のもとに語ることに抵抗を感じていた。両大陸の黒人を無邪気に結びつけ、両者を同じ「黒人」として区別なく語ろうとする人種主義を彼は拒否するのだ。人種という概念の不確かさに気づき、そのよう

な人種に基づく同一性の主張にいかがわしさを感じていた点で、ウルティアは本質主義的な人種観を軽々と乗り越えていた。

しかしその一方で、人種の混血を白人による一方的な吸収と表現するのはどういうことだろうか。あくまでも消散するのは黒人だけで、白人の永続性は暗に保障されている。この見解を支えるのは、白人文化は黒人文化よりも優れているという、当時の社会に浸透していた認識だ。ここに同化主義者ウルティアの乗り越えきれない人種主義が露呈している。先述のとおり、黒人は本来的に白人よりも劣るという人種主義に彼は異を唱える。だが、白人文化への同化を「進歩」と考える時点で、黒人文化をより遅れた文化とみなすもう一つの人種主義を彼は受け入れてしまっていた。

アフリカの黒人と同列に語られることに対して抱く違和感を正直に吐露するこのコラムでは、その抑制の効いた語りに「大文字の黒人」やアフリカに対する偏見を読み取るのは難しいかもしれない。ところが、およそ一年前に書かれた別のコラムとあわせて読むと、彼がアフリカを「未開」ととらえる白人の視点を内面化していたことが明らかになる。

1929年3月31日のコラム「調和」で、ウルティアはキューバに伝わるアフリカ系宗教をとりあげた。彼は、祖先がアフリカから持ちこんだ「宗教」がキューバでは「魔術」と混同されていると指摘し、「悪を实践する魔術」と「善を目指す」アフリカの宗教とは区別すべきだと論じる。しかし、コラムの論点は別のところにある。祖先の宗教を敬いつつも、黒人はこの「未開な宗教」を捨てて「われわれの宗教」であるカトリックを信ずるべきで、そうすることが祖先に対する敬意になる、というのが彼の主張だ。

「おそらく祖先を敬う気持ちから、今でもごく少数の黒人はアフリカの遺物を崇拜している。しかし、その敬うべき祖先は、無知ながらも十分に聡明だったので、自分たちと同じ道徳的原理をもち、なおかつ文明と文化で高められた宗教を信奉していたのだ。先人のこの進歩的な精神こそ汲みとるべきだ。」[Urrutia 290331]

「文明と文化で高められた宗教」とは、支配者スペイン人の宗教カトリックのことだ。植民地時代、キューバの教会権力は決して強くなかったが、黒人奴隷に洗礼を与えることは義務だった。ウルティアはそれをスペイン人の強制ではなく祖先が自発的に望んだ結果ととらえ、聡明な判断だったと評価する。

「[アフリカの宗教を信仰する黒人は] 良心の呵責なく、祖先への愛をもって遺物を葬

り去り、祖先たちの偉大な進歩の事業を仕上げ、完成させることで、彼らに敬意を払うべきだ。彼らはカトリックへの最初の一歩を踏み出し、未開を特徴とするあらゆる社会習慣を放棄したのだ。[中略] また、キューバの独立に身を捧げ、子供たちの教育に気を配り、そして、われわれが白人の文明に同化して進歩する姿に安堵しながら世を去った。」[Ibid.]

「アフリカの未開」と「白人の文明」とを対置する、ウルティアの進化論的な文化観がここでは明らかである。しかも、カトリックを「われわれの宗教」と呼ぶウルティアは、「未開な習慣」を捨てきれない黒人たちと距離を置き、「白人の文明」の側に立っている¹⁸⁾。ガーヴィーのように、新大陸の黒人がアフリカ大陸と再びつながることを求めた背景には、奴隷制によって暴力的に奪い取られた歴史を回復したいという願望があった。それは、白人の一方的な視点からみた歴史だけではなく、黒人の側からのもう一つの歴史を編み出す作業だった。だが、ウルティアは奴隷制の歴史を黒人の進歩の歴史として語ることに何の躊躇いも見せない。だからこそ、白人文化に同化したウルティアは、アフリカ大陸の「未開」の黒人と同列に語られることに違和感を抱くのであり、そして彼の人種意識に対する拒否は、文化の白色化こそが進歩であるという信念と表裏一体となっているのだった。

Ⅲ. 黒人芸術と未開主義¹⁹⁾

先述のとおり、両大戦間期は欧米でアフリカ的なものへの関心が高まり、キューバでもアフロキューバ主義の芸術が開花した時代だった。当然、「ある人種の理想」もこの潮流と切り離して語ることはできない。

1930年4月20日付「日曜版」には、それまでしばしば評論などを寄稿していた混血^{ムラート}の若きジャーナリスト、ニコラス・ギジェンの詩「ソンのモチーフ」が掲載された[Guillén 300420]。この初期の代表作が高い評価を得たことからギジェンは詩人としての地位を確立し、やがて「国民的詩人」と呼ばれるようになる。ソン、ルンバなどのアフロキューバ音楽や黒人の話し方に想を得た作風から、ギジェンはアフロキューバ主義の詩人とみなされている。彼がこの独自の作風を確立したのが「日曜版」においてであったことを考えれば、ウルティアのこのセクションはアフロキューバ主義の普及に貢献していたといえるだろう。

また、1929年3月3日付「日曜版」は、キューバを代表する民俗学者フェルナンド・オルティスが書いたエッセイ「ヨーロッパのアフリカの芸術」を掲載し、ヨーロッパの新しい美術、文学、そしてとりわけ音楽がアフリカの影響を大きく受けていることを読者に伝えている。さらに1930年には、ハーレム・ルネサンスの詩人ラングストン・ヒューズやプエルトリコの詩人ルイス・パレス＝マトスなど、国外の「黒人詩」もたびたび紹介している [Hughes 300608] [Hughes 300713] [Pales Matos 301026]²⁰。「日曜版」は黒人芸術に対する時代の関心をたしかに反映していたのだ。

しかし、ウルティア本人は特にアフロキューバ主義に肩入れすることも、脚光を浴び続ける黒人芸術に熱狂しているようすもない。むしろ反対に、彼はこの流行をどこか醒めた目で分析し、それに潜む危険な落とし穴に注意をうながしている。

1930年2月23日の「調和」にウルティアは「洗練された隷従」の副題をつけ、芸術とスポーツにおける黒人の世界的な勝利は確実な移行ではあるが、「隷従の第二局面だ」と論じた。白人が黒人芸術を歓迎したことで、黒人は努力なしにかねてから望んでいた白人との交流を手に入れたが、これは一見勝利のようにみえて、じつは白人への隷従にすぎない、とウルティアは警告する。そして、もし白人が黒人芸術に飽きたらどうなるのか、「科学や哲学やテクノロジーなど、現代の文明を育て、推進するもの」において黒人は何ができるのかと問いかけ、「真に解放的な勝利が伴わないかぎり私はこの勝利に熱狂することはないだろう」と彼は宣言する [Urrutia 300223]。

同年7月27日の「調和」でも同じ主題を論じ、「黒人芸術は、発見されるやいなやその本来の正しい姿ではなくなり、白人の消費に供する商品に変質」し始め、黒人は「白人のための単なる見世物」にすぎなくなっていると批判する [Urrutia 300727]。

黒人の「進歩」ではなく、「黒人らしさ」、つまり黒人の「生まれながら」の素質に白人の賞賛が向けられていることがウルティアを不安にさせた。それはつい最近まで「未開」として否定されていた素質ではなかったか。「未開」を脱ぎ捨て白人の文明に「進歩」することを、キューバ人として生きるための使命と考えるウルティアには、この価値観の転倒を素直に受け入れることが困難だった。それは白人の単なる気まぐれ、一時的な流行に過ぎないとの思いが彼を慎重にさせた。

彼が警戒するのはエキゾチックな他者を追い求める未開主義の陥穽だ。たしかに、黒人芸術への関心はしばしば単なる未開の賞賛におちいり、黒人には未開の体現者であることのみを求める傾向があった。アフロキューバ主義もその例外ではない。芸術家たちは黒人の生の体験を知ること、知ろうとすることもなく、表層的な黒人解釈にとどまっていた

という後年の批判を完全に免れることはできなかった²¹⁾。ウルティアは黒人芸術に寄り沿う未開主義を直感的に嗅ぎ取っていたのだ。

ウルティアは黒人芸術に冷静な目を向け、その評価には慎重だった。その慎重さは、彼自身が「アフリカの未開」と「白人の文明」という二項対立的な理解にとらわれすぎていたことにも起因している。だがその一方で、彼は黒人芸術を未開主義として切り捨て、等閑に付すこともできなかった。黒人芸術の何かを彼をひきとめていた。そもそも、ヨーロッパにおける黒人芸術やアフリカへの関心は、第一次大戦後に高まった西欧近代文明に対する懐疑と無縁ではない。「アフリカの未開」と「ヨーロッパの文明」とを固定された優劣関係の中に対置する発想そのものを、根底から揺るがす可能性を秘めていたはずだ。そして、その可能性はウルティアの同化に対する固い信念をも確かに揺り動かしていた。

先述のオルティスのエッセイの冒頭には、おそらくウルティアが書いたと思われる次のようなコメントが添えられている。

「日ごとに黒人の賞賛すべき長所が認められていく。[中略] われわれにはすでに独自の芸術、文学があるのだ。」 [Ortiz 290303]

本文のエッセイでは、やがてキューバのソンも、ジャズのようにヨーロッパ音楽に影響を与えるだろうというオルティスの期待が愛国心とともに綴られている [Ibid.]。ソンは1910年代末から首都ハバナ市の下層階級の、主に黒人に好まれた音楽である。当初、中・上流階級の人々は「アフリカの太鼓」を使う粗野な音楽だと毛嫌いし、ソンにほとんど関心を向けなかった。むしろ演奏を取り締まろうとさえしていた。だが、ヨーロッパの黒人芸術への関心にじかに触れた白人知識人オルティスは、アフリカ的なものをキューバ文化として語る可能性を見いだしていた。それに対してコメントでは、人種を否定し、キューバ人であることを何よりも優先しているはずのウルティアが、ヨーロッパに影響を与える「アフリカ」に自らを同一化し、キューバ人としてよりも黒人としての喜びを素直に表現しているのだ。

それから8日後、3月11日の「コラム」で、ウルティアは一年前に亡くなった父親の思い出を語る。英語の翻訳も手がける知性あふれる音楽教師だった父は、さまざまな楽器をこなし、オーケストラや教会のコンサートで演奏していた。その一方で、アフリカ伝来の太鼓にも習熟していた。その父は息子グスタボに「祖先の音楽」の美しさを教えようとしたが、まだ学生だったグスタボは父の気持ちを素直に受け止められずにいた。

「その〔アフリカの〕音楽に対して抱く生まれつきの愛着を押し殺そうと、スコラ学者よろしくあらゆる分別を利用した。その音楽は『知識人』としての私、将来『A級人間』となるべき私にふさわしいとは思えなかった。」[Urrutia 290311S]

ここで浮き彫りになるのは、アフリカの祖先と彼らの文化に対する愛着を感じると同時に、それを「未開」として切り捨てなければならない、白人の価値観を内面化したキューバの黒人エリートの苦悩である。「進歩」のためには祖先を否定するしか選択肢はないと信じてきたウルティアに、「未開ではないアフリカ」について語るオルティスの報告は別の選択肢の可能性を示唆していた。そして、呪縛を解くかのように次のように言う。

「アフリカの音楽は芸術に貢献し、世界でその名誉を回復しはじめている。もう、この音楽を愛していることを恥じる理由はないのだ。」[Ibid.]

このときウルティアは、アフリカに祖先をもつ黒人としての誇りを確かに感じていたのだ。

それから5ヵ月後、1929年8月24日の「コラム」で、彼の黒人としての誇りはより鮮明に示される。ウルティアは珍しく自分の出自に言及している。彼の父方祖父は、奴隷となる以前、アフリカの郷土でアレブエ・ショラ・イブアロという名の「ギニアの王子」だった²²⁾。植民地時代のキューバには自由黒人や奴隷がその「出身民族」ごとに集まるカビルドという組織があった²³⁾。この組織の中で黒人たちはアフリカの「出身民族」の宗教や風習の記憶を再現していた。独立運動に利用されるのをおそれて植民地政府がカビルドの活動を禁止したのは1888年である。81年生まれのグスタボが子供のころには、まだ細々と活動が続いていた。「王子」の直系の孫であるグスタボは、子供のころ父親とともに祖父の「出身民族」であるルクミのカビルドを訪ねていた²⁴⁾。そして、そのたびに王家のための太鼓演奏で迎えられた。グスタボはそのことに密かな誇りを感じながらも、「祖父に知的な慣習が欠けていることで、自分が笑い者になるのではないかという不安」から、王家の血筋を引くという誇りを押し殺していた。高貴な身分といっても「粗野で嫌悪すべき未開の宮廷に由来する」のでは自慢にならなかった。血統としては、大工ではあってもアストゥリアス出身の母方祖父の方がよほど好ましく思えたのだ [Urrutia 290824S]。

ところが、ある評論を読んでウルティアは考えを改める。それは、アフリカの植民地に詳しいフランス人作家アンドレ・ドゥメゾンが書いた「黒人の言語と文学に関する評論」

だった。西アフリカのウォロフとマンディングという二つの民族におけるグリオの伝統について論じるこの評論で、著者はアフリカ人には不完全な言語しかなく文学などありえないという当時の人口に膾炙した考えを否定し、複雑な言語と口承文芸の存在を指摘している。ウルティアはこのスペイン語訳を、翌25日の「日曜版」でほぼ半分のスペースを割いて紹介した [Demaison 290825]。ドゥメゾンの文章を読んで「ウォロフとマンディングの宮廷の知的栄光に夢中になった」と彼は告白する。そして、祖父の「出身民族」ルクミでも同じ発見があるかもしれないという期待に胸を膨らませながら、これからは「アフリカの称号を選ぼう」と決意している [Urrutia 290824S]。

数ヵ月後、この決意は具体的な行動となって現れた。1929年11月17日付「日曜版」に、ウルティアの祖父の名アレブエ・ショラと署名されたエッセイが掲載されたのだ。その後も断続的に全部で11回この署名は「日曜版」に登場する。エッセイの内容などから判断しても、この署名がウルティアのものであるのは間違いない。そうであるならば、彼のこの行為に読み取れるのはアフリカとの絆を、そっと、しかし確かな意志をもってつなぎとめようとするウルティアの姿ではないだろうか。

ドゥメゾンの評論の影響は別のところにも見てとれる。1930年10月19日付「日曜版」に、ウルティアは民話「シキヤンガマ——ガンガの物語」を掲載した。これは、キューバで彼自身が採集した、黒人奴隷の「出身民族」の一つガンガの民話である²⁵⁾。さらに11月9日からはシエラレオネの民話を全部で4回掲載している²⁶⁾。おそらくウルティアは、これらの民話にアフリカの「知的栄光」を見ていたのだろう。

祖父の名で署名し、アフリカの民話に関心を寄せるウルティアに、未開主義を警戒する同化主義者の面影はない。そこにあるのは、「進歩」することに夢中になるあまり見失ってきた黒人としての自分の過去を取り戻そうとする姿だ。彼は「未開ではないアフリカ」にたしかに心惹かれ始めていた。しかし、彼の「アフリカ」に対する評価はまだ揺れ動いている。先述のとおり1930年2月9日の「コラム」——それは「アフリカの称号」を選ぶと宣言してわずか5ヵ月後のことだ——では、アフリカを愛していないと言い切っているのだから。彼は「アフリカ」に対する背反する感情を同時に抱え込んでしまっていた。

IV. キューバ人として、それでもなお黒人として

「未開な習慣」を捨てて「白人の文明に同化して進歩する」よう呼びかけるウルティアは、まぎれもない同化主義者だった。しかも、何よりもまずキューバ人たらんとするあま

り、人種意識をもつことを否定し、アメリカ大陸の黒人はいずれ「白人の中に消散する」とさえ論じている。ただ一つのキューバの魂をめざすという国民的課題を前にしたとき、ウルティアは黒人であることへのこだわりをいとも簡単に脱ぎ捨てていた。ところがその一方で、前章でみたように、彼は「未開ではないアフリカ」の発見に喜び、アフリカとの絆を静かに取り戻そうともしている。彼は本当に白人の中に消散することを望んでいたのだろうか。

1930年7月13日付「日曜版」に、出版を控えたラウル・ベルデス＝プラナスの著作『キューバ黒人についての覚書』にファン・マリネーロが寄せた序文が掲載された。マリネーロは当時もっとも注目されていた若手評論家の一人だ。この序文で彼は、すべての人間が同じ地平にたつてはじめて人種は融合し、黒人問題は解決されると主張した上で、次のような問いを投げかける。

「平等と〔人種の〕融合が完全な正義へと向う道であることを認めた上で、次のような疑問が残る。黒人は彼ら固有の価値の永続と賞賛を望んでいるのだろうか。それともそれらの価値が完全に失われることが大切だと考えるのだろうか。というのも、黒人はその劣等性を払拭するために白人の奔流の中に溶け込まざるを得ないなら、黒人の個性を鍛えればそれだけ目標から遠ざかることになるのだから。黒人の運命の悲劇は自分自身ではなくなるという、まさにその点にある。」〔Marinello 300713〕

さらに先で彼は、ここ数年の「黒人的なるものの流行」は黒人を見世物とし、それが新たな人種分離の傾向をつくっていると憂慮する。黒人は何を望んでいるのかとマリネーロが問いかける背景には、黒人芸術の流行に抱く彼なりの危惧がある。それは黒人芸術を「洗練された隷従」と呼んだウルティアの批判と通じている。二人とも黒人芸術が陥りやすい未開主義と、それに伴う黒人の差異化を懸念しているのだ。二人に共通するのはそれだけではない。黒人の「進歩」とは白人の奔流に溶け込むことというマリネーロの発想は、アメリカ大陸の黒人は「白人の中に消散する」運命にあると考え、「未開の宗教」を捨てて「白人の文明」に同化すべきと主張したウルティアと同じである。違いといえば、そのような運命をマリネーロは「悲劇」と呼ぶのに対し、ウルティアは「祖先の進歩的精神の継承」として積極的に受け入れている点だ。二人の意見は大筋一致しているように見える。だが、翌週の7月20日、予想外にもウルティアはマリネーロの考えをきっぱりと拒絶する。

「黒人は、純粋に哲学的な領域において、集団自殺の命題を拒まねばならない。なぜなら、黒人は自分が劣っているのではなく『遅れている』と考えるのだから。また、黒人の存在は自然による不可避の事実なのだから。もし絶滅してしまえば白人の後悔は大きいだろう」[Urrutia 300720]

「黒人の固有の価値」、要するに黒人の文化を「劣等」なものにとらえるマリネーロは、自分の文化を失った黒人はもはや「黒人」たりえないと考える。つまり、彼は黒人の「文化的進歩」を一方で認めつつも、黒人は文化的に劣るという人種主義的な命題を留保している。彼にとって「黒人」とは文化的に「劣等な人種」としてしか存在しない。この人種主義をウルティアは拒絶するのだ。そして、白人文化に同化しても黒人は黒人だと頑なに反論する。

似たような議論は「コラム」を開始してまだ間もない1928年6月29日にすでに現れていた。そこでは、19世紀末にもっとも影響力のあった黒人指導者で、マルティの良き理解者でもあったファン＝グアルベルト・ゴメスをめぐり、ある友人との会話が取り上げられた。そして「白人の知性のあらゆる特徴」をそなえるゴメスは「黒人ではなく白人」だと主張する友人に対し、ここでもウルティアは「ゴメスは黒人だ」と断固として反論している [Urrutia 280629S]。

では、ウルティアの言う「黒人」とは何なのか。白人文化に同化し、人種意識を否定する黒人が、それでもまだ黒人であり続けることを保証するものは何なのだろうか。肌の色だろうか。だが、それでは彼が批判したアフリカの黒人と新大陸の黒人とを同列にとらえる人種主義と変わらないだろう。ウルティアは「黒人の存在は不可避の事実」というばかりで、この問いには答えてくれない。しかし、そのことが逆に黒人であることの重みを露見させている。同化の必要と人種概念の無意味さを理屈の上ではどんなに理解していても、ウルティアにとって黒人であることは否定しようにもしきれない本源的な何かとして存在していた。もしかすると、ウルティアは同化主義者として本当に「白人の中に消散する」ことを望んでいたのかもしれない。だが、それが不可能であり、キューバ人となってもまだなお黒人として生きなければならないことを彼は十分自覚していた。

おわりに

ウルティアは「ある人種の理想」で人種差別を問題化するという、当時だれも近寄りた

がらないテーマに挑戦した。人種間の対立に導くことなく調和的な関係を築き上げること、それがジャーナリストとしてのウルティアの課題だった。それは単なる人種問題を超えて、キューバという「一つの魂」を得るというマルティの理念を継承した国民的課題でもあった。そして、この国民的課題を前にしたとき、人種意識は不要だとウルティアは論じる。しかしその一方で、同化した黒人はもはや黒人ではないという主張には頑固として反論した。

黒人であることをめぐって、一見ダブルスタンダードともとれるウルティアの態度は、彼の次のような表現を参照するとわかりやすいのかもしれない。

「白人も黒人も、たった一つの声で調和ハーモニーを作ることにはできない。」 [Urrutia 281223]

キューバという一つの魂になるためにウルティアが目指していたのはモノフォニーではない。二つの異なる音が一つのハーモニーとなることを求めていた。そしてまた、その二つの異なる音が不協和音とならないために、黒人は人種意識を捨て、同化しなくてはならない。しかし、あくまで同じ音にならない程度に。

「ある人種の理想」は、黒人がキューバ人として生きるために何をすべきか、黒人はいかに国民文化の建設に参加すべきかを貫いた主題としている。この主題に関しては饒舌なウルティアだが、キューバ人がそれでもなお黒人であるためにどう生きるべきかについて彼は沈黙してしまう。キューバ人でありながらなおかつ黒人であり続けることを可能にする、そのような論理をウルティアはまだ手に入れていなかった。黒人であることの重みを不可避の事実として受け止めながら、彼がその重みに正面から向き合うことを躊躇させたのは、「キューバ人とは、白人以上、黒人以上」というマルティの呪縛だろうか、それとも「アフリカの未開」と「白人の文明」とを対置する価値観だろうか。いずれにせよ、ここに「ある人種の理想」の限界がある。

「ある人種の理想」は、時代を先導し切り拓く革新的な役割を担ってはいない。キューバ人として黒人が生きるための新しいヴィジョンを提示することもなく、また人種概念の不毛さに気づいていながら、白人でも黒人でもありと同時に大文字の白人でも大文字の黒人でもない「混血ムラト」という存在に新たな可能性を見いだすこともなかった。しかしながら、人種間の調和的関係の実現をキューバ人の使命とみなし、白人文化への同化を唯一の進歩の道と信奉してきた一人の黒人知識人が、欧米での黒人芸術やアフリカへの関心の高まりに静かに呼応しながら、自分が黒人であることの重みに徐々に向き合っていく軌跡を浮か

び上がらせている。これがどこにどのように到達するかを知るには、「ある人種の理想」以降のウルティアの著作の分析を待たなければならない。ただ、この軌跡が白人と黒人の不協和音へと向かわないことは確かであろう。

注

- 1) 従来キューバでは、人種の分類として「白人」「混血^{ムラート}」「黒人」を使うのが一般的だが、その分類は流動的かつ相対的で、ときにその人の社会的地位や経済力が影響する。また、人種差別を論じるとき、「白人」と「混血^{ムラート}」, 「混血^{ムラート}」と「黒人」との間に固有の問題がないわけではないが、それらも「白人」と「黒人」の間の差別問題に一般化されるのが常である。本稿では、キューバで使われる用法に従って「白人」「黒人」「混血^{ムラート}」という語を用いる。したがって本来ならば引用符をつけるべきだが、煩雑さを避けるために特に必要な箇所をのぞいて省略する。
- 2) 『ディアリオ・デ・ラ・マリーナ *Diario de la Marina*』は、植民地時代から1960年まで続いた保守系新聞である。その日曜版は音楽、映画、ラジオなどに関する雑多な情報をページごとに掲載していた。なお、日曜版「ある人種の理想」が始まってからも、ウルティアは自分が単独で執筆するコラム「ある人種の理想」を継続し、平日の紙上に掲載した。
- 3) 日曜版「ある人種の理想」は、当時のマチャード政権の検閲による幾度かの新聞休刊を経ながら、全部で110回続いた。日曜版の廃止も検閲による休刊が引き金であった。なお、「ある人種の理想」終了後も、ウルティアは単独コラム「調和」を晩年まで執筆し続けた。
- 4) 黒人ジャーナリストのラモン・バスコンセロスがトリスタンという筆名で1915年から16年にかけて日刊紙『ラ・プレNSA』に執筆したコラム「黒人種の鼓動」が、広く白人読者をも想定していたという点で唯一の先例である。ジャーナリズムを介しての黒人社会運動に関しては [Fernández Robaina 1990] に詳しい。
- 5) 黒人社会運動史におけるウルティアのコラムの重要性はたびたび注目されながらも、まとまった研究はまだ少ない。ウルティアおよび「ある人種の理想」に関する論文としては [Cook 1943], [Fernández Robaina 1986], [Pividal Herryman 2000], [Schwartz 1998] があるが、いずれも紹介の域を出ていない。その他ウルティアの重要性を指摘しているものとしては [Castellanos & Castellanos 1990], [Fernández Robaina 1990], [de la Fuente 2001] などがある。
- 6) ウルティアは、1901年にハバナの高等商業学校を卒業後、会計士として商社に就職したのち、ビジネスマンとして独立。13年から建築の勉強を始め、その後ハバナ市のいくつかの代表的な建築物を手がけた。ウルティアの建築家としての活躍については [Cook 1943:224-225] に詳しい。また、34年に国家評議会の委員、36年にはハバナ市の文化局長も務めた。
- 7) ウルティアがコラム執筆を始めた経緯については [Cook 1943:225] を参照。保守系として知られる『ディアリオ・デ・ラ・マリーナ』が、黒人コラムを受け入れた理由は不明だが、社会進出を始めた黒人に購読層を広げたいというきわめて商業的な戦略を理由として指摘する研究者がいる。たとえば [Fernández Robaina 1990:128], [ILL 1984:991]。
- 8) 「コラム」と「日曜版」内のエッセイを引用する場合、著者名と掲載された新聞の年月日で表記する。なお、日付のあとのSは「コラム」を示している。
- 9) 第一次独立運動は1868年から78年まで続いた。この独立運動を開始したカルロス・マヌエル＝

- デ＝セスベデスは、自分の農園の奴隷を解放し戦いに参加させた。独立軍が採択した憲法には、のちに修正されたとはいえ、奴隷解放が宣言されている。第二次独立戦争は1895年に開戦。
- 10) マルティの人種に関する理念とその解釈をめぐる分析は [Helg 1995] および [de la Fuente 2001] を参照のこと。
 - 11) 米国による統治期間以降、キューバに米国の人種観がどのように影響したかについては [Helg 1995:91-116] に詳しい。
 - 12) もちろん批判がなかったわけではない。マルティネスと名乗るある読者は「黒人問題はそれについて語るときにのみ存在する」として「ある人種の理想」を批判し、キューバに黒人問題はないと主張している [Martínez 290519]。
 - 13) キューバでは糖業の不振が続いた1920年代に都市化が進んだ。とりわけ黒人の移住率が高いことは、それだけ職を求める割合が高かったことを物語っている [de la Fuente 2001:110-115]。
 - 14) キューバにおけるガーヴィー運動については [Lewis 1988:99-113], [Fernández Robaina 1998] を参照。ちなみに、アフリカ帰還運動は実現せず、ガーヴィー本人は1925年に米国で詐欺の容疑で逮捕され、2年後にはジャマイカに強制送還された。
 - 15) 1920年代を通じてキューバはジャマイカやハイチから多くの移民を受け入れてきた。彼らのほとんどが島の東部のさとうきび農園で契約労働者として働いた。
 - 16) 支部の閉鎖は約6ヶ月後に解除された。閉鎖の理由は人種別の政治組織を禁止するモルア法に抵触するためとされたが、なぜこの時期になって取り締まられたのか、その理由は明らかでない。不況が深刻化し失業者が増加する中で、移民に対する風当たりが強くなっていたことが影響したと考えられる。また、1930年にガーヴィーは再びキューバを訪れようとしたが、当時の大統領マチャードはこれを拒否した [Lewis 1988:112]。
 - 17) 黒人の白色化や消滅が避けがたい運命であるという考えをウルティアは他のコラムでも繰り返している。たとえば [Urrutia 281202], [Urrutia 290609] を参照。
 - 18) 1928年12月7日の「コラム」でも、黒人はカトリックの活動に貢献する、熱心で実践的な信者だとウルティアは強調している [Urrutia 281207S]。
 - 19) 本稿では「黒人芸術」をウルティアが使う *el arte negro* の訳語として用いる。フランス語の *l'art nègre* がもっぱら黒人の造形芸術をさしていたのに対し、ウルティアは *el arte negro* を芸術表現一般にあてて用いている。また、黒人芸術は必ずしも黒人による芸術を意味していない。作者が白人であっても、当時の人々の審美的規範に照らし合わせて「黒人的な表現」が認められれば、その作品は黒人芸術となる。反対に作者が黒人であっても「黒人的な表現」が認められなければ、黒人芸術というカテゴリーには該当しない。
 - 20) ほかに、ウルグアイの詩人イルデフォンソ・ペレダ＝バルデスの詩が掲載されている [Pereda Valdés 300406] [Pereda Valdés 300413]。また、ラングストン・ヒューズが1930年3月にキューバを訪問した際、ウルティアは自分のコラムで彼の滞在を報じ [Urrutia 300302], ギジェンによるインタビューも掲載している [Guillén 300309]。
 - 21) たとえば、1938年にアフロキューバ主義の詩のアンソロジーを出版したラモン・ギラオは、自らも参加していたアフロキューバ主義は「黒人の社会的命運を変えることはなかった」と反省している [Guirao 1938:XV-XVI]。
 - 22) 奴隷貿易が行われていた時代、ギニア Guinea の名称は西アフリカの海岸地帯一帯をさして使わ

人種の調和を求めて

れた。キューバではおもに現在のコートジボワール共和国からナイジェリアのニジェール川河口付近までをさしていた。

- 23) キューバでは、奴隷の積出港を目安として奴隷商人が採用した民族名が定着していた。したがってその分類はアフリカの民族分類と必ずしも一致していない。
- 24) ルクミ *lucumí* は、現在ナイジェリアとベナンに居住するヨルバにほぼ該当する。
- 25) ガンガ *gangá* の名称はシエラ・レオネの南からリベリアの北にいたる地域出身者と、ビアフラ湾沿岸地域出身者に対して用いられた [Castellanos & Castellanos 1988:32-34]。ウルティアの採集した物語は、そこに登場する固有名詞などから、後者のガンガに属すると考えられる。ちなみに、シキヤングマ *Siquillángama* は川の神である巨大魚の名前としてこの物語に登場する。
- 26) 米国領事としてシエラレオネに長く滞在したウィリアム・ヤービーの夫人が採集した民話のスペイン語訳である。1930年12月7日の「日曜版」にはヤービー夫人の簡単な紹介が顔写真とともに掲載されている。

【参考資料：“Ideales de una raza”, en *Diario de la Marina*】

Demaison, André

[290825] “Estudio Crítico Sobre la Lengua y la Literatura de los Negros.”

Guillén, Nicolás

[300309] “Conversación con Langston Hughes.”

[300420] “Motivos de Son.”

Hughes, Langston

[300608] “Portero de Pullman.”

[300713] “Poema,” “Calma en el Mar,” “Nota de un Suicida,” “Miedo.”

Marinello, Juan

[300713] “Una palabra frente a unas páginas ‘Negras.’”

Martínez, M.

[290519] “Cómo nos ven: Carta topográfica.”

Ortiz, Fernando

[290303] “Cómo nos ven: El Arte Africanoide en Europa.”

Pales Matos, Luis

[301026] “Danza negra.”

Pereda Valdés, Ildefonso

[300406] “Canción de cuna para dormir un negrito.”

[300413] “La guitarra de los negros.”

Urrutia, Gustavo

[280419S] “Ideales de una raza: Explicando.”

[280420S] “Ideales de una raza: En las tiendas.”

[280425S] “Ideales de una raza: El diagnóstico.”

[280502S] “Ideales de una raza: El negro que tiene que cambiar de domicilio.”

- [280515S] “Ideales de una raza: Margarito se explica.”
- [280629S] “Ideales de una raza: ¿Juan Gualberto es negro?”
- [280708S] “Ideales de una raza: ¡Cállense... y esperen!”
- [280729S] “Ideales de una raza: ¿Por qué llora el niño?”
- [281111] “Armonías,” en “Ideales de una raza.”
- [281125] “Armonías,” en “Ideales de una raza.”
- [281202] “Armonías,” en “Ideales de una raza.”
- [281207S] “Ideales de una raza: Los negros cubanos en la religión católica.”
- [281223] “Armonías,” en “Ideales de una raza.”
- [290106] “Armonías,” en “Ideales de una raza.”
- [290311S] “Ideales de una raza: Tenía razón.”
- [290331] “Armonías: La brujería,” en “Ideales de una raza.”
- [290414] “Armonías,” en “Ideales de una raza.”
- [290609] “Armonías: Igualdad y fraternidad,” en “Ideales de una raza.”
- [290824S] “Ideales de una raza: Arebbwé Scholá Ibbwabó.”
- [290915] “Armonías: Superación,” en “Ideales de una raza.”
- [290922] “Armonías: Fantasía en si mayor,” en “Ideales de una raza.”
- [290929] “Armonías: Radiofonema,” en “Ideales de una raza.”
- [291110] “Armonías: Presente y futuro,” en “Ideales de una raza.”
- [300209] “Armonías: La esclavitud, la cultura y el negro,” en “Ideales de una raza.”
- [300223] “Armonías: La elegante servidumbre,” en “Ideales de una raza.”
- [300302] “Armonías: Lo sutil de nuestro problema,” en “Ideales de una raza.”
- [300720] “Armonías: Pidiendo práctico,” en “Ideales de una raza.”
- [300727] “Armonías: El espectáculo,” en “Ideales de una raza.”
- [301012] “Armonías: Espíritu de raza,” en “Ideales de una raza.”

【参考文献】

- Castellanos, Jorge & Isabel Castellanos
 1990 *Cultura Afrocubana 2*. Miami: Ediciones Universal.
- Cook, Mercer
 1943 “Urrutia”, *Phylon*. Vol. 4, No. 3, pp. 220-232.
- de la Fuente, Alejandro
 2001 *A Nation for All: Race, Inequality, and Politics in Twentieth-Century Cuba*.
 Chapel Hill & London: The University of North Carolina Press.
- Fernández Robaina, Tomás
 1986 “Apuntes para una aproximación al pensamiento y la obra de Gustavo E. Urrutia (1881-1958)”,
UNION. No. 2, pp. 128-148.
- 1990 *El negro en Cuba, 1920-1958*. La Habana: Editorial de Ciencias Sociales.
- 1998 “Marcus Garvey in Cuba: Urrutia, Cubans, and Black Nationalism”, In: Lisa Brook & Digna

Castañeda Fuertes, eds., *Between Race and Empire: African-Americans and Cubans before the Cuban Revolution*. Philadelphia: Temple University Press, pp. 120-128.

Guirao, Ramón

1938 *Orbita de la Poesía Afrocubana, 1928-1937*. La Habana: Ucar, García y Cía.

Helg, Aline

1995 *Our Rightful Share: The Afro-Cuban Struggle for Equality, 1886-1912*. Chapel Hill & London: The University of North Carolina Press.

Instituto de Literatura y Lingüística de la Academia de Ciencias de Cuba (ILL)

1984 *Diccionario de la Literatura Cubana*. La Habana: Editorial Letras Cubanas.

Lewis, Rupert

1988 *Marcus Garvey: Anti-Colonial Champion*. Trenton: Africa World Press.

Martí, José

1963 [1891] “Discurso en el Liceo Cubano, Tampa”, In: *Obras Completas 4*. La Habana: Editorial Nacional de Cuba, pp. 267-286. (ホセ・マルティ「すべての人々とともに、そしてすべての人々のために」『ホセ・マルティ選集3』後藤政子他訳、日本経済評論社、1999年、pp. 61-76)。

1963 [1893] “Mi raza”, In: *Obras Completas 2*. La Habana: Editorial Nacional de Cuba, pp. 298-300. (ホセ・マルティ「私の人種」『ホセ・マルティ選集3』後藤政子他訳、日本経済評論社、1999年、pp. 178-181)。

Pividal Herryman, Lilianne

2000 “Ideales de una raza. Página dominical. Tribuna de ideas cubanas”, *Vivarium*. No. XVII, Junio, pp. 60-64.

Schwartz, Rosalie

1998 “Cuba’s Roaring Twenties: Race Consciousness and the Column “Ideales de una Raza”, In: Lisa Brook & Digna Castañeda Fuertes, eds., *Between Race and Empire: African-Americans and Cubans before the Cuban Revolution*. Philadelphia: Temple University Press, pp. 104-119.